

## 帯活動 — その正体と魅力

松沢伸二

(新潟大学)

## 1. 投げ込み活動と帯活動

筆者は1980年代に中学校の教壇に立ったが、当時は「帯活動」という言葉は使われていなかった。近頃よく耳にする帯活動とはどんな活動だろうか。

帯活動は「投げ込み教材」と関係がある。投げ込み教材には教科書内、教科書外、教師自作のものがある。教科書は通常のLessonとは別に、英語の歌、詩、ことわざ、名言、早口言葉などを掲載している。教師はこれらの教材を適宜授業に投げ込んで、生徒の英語への興味をかき立てることができる。NEW CROWNには“Sing”, “Stand by Me”, “Take Me Home, Country Roads”といった名曲が収録されている。ぜひクラスみんなで一緒に歌い、英語を学ぶ喜びを味わうようにしたい。

投げ込み教材は教科書外にも見つかる。例えば過日、地元の新聞の紙面に次の英文が載った(「週刊Let's えいGO!」『新潟日報』平成25年9月22日)。

The word “omotenashi” is drawing a lot of attention in Japan. Newscaster Christel Takigawa used it with a gesture in her speech at the IOC meeting in Buenos Aires.

この小中学生向け紙面には、単語の和訳、カタカナ発音、携帯電話で音声を聞くためのQRコード、英文の和訳、写真、背景知識の補充、さらに「今週の単語」として“attention”の解説がある。この種の記事を授業に投げ込めば、生徒は学習している英語が現実世界でリアル・タイムに使われていることを実感して、英語学習への意欲を増すであろう。

投げ込み教材は教師が作ることも多い。中学校1年生であれば、ローマ字のヘボン式と訓令式の違いを確認するハンドアウトや、既習の単語の発音と綴

りの関係をフォニックスの視点で整理するハンドアウトを作成したり、1人称・2人称・3人称の違いを視覚的に理解できるイラストを配ったりすることができる。こうした投げ込み教材は英語学習でのつまずきを取り除くのに有効だ。

以上のように投げ込み教材は、様々な目的で、通常の授業から離れた内容を、単発的に扱う活動に用いる。英語教師は以前から投げ込み教材を使ってきた。国語や理科などの他教科の教師も、小学校や高校の教師も投げ込み教材を活用している。そして次に見るように、投げ込み教材を使う「投げ込み活動」を毎授業続けると、それは「帯活動」になる。

## 2. 単元計画と帯活動

NEW CROWNの単元は、「とびら、GET, USE, まとめ」で構成されている。1単元は通常9～11時間かけて指導する。例えばあるLessonの全9時間の単元計画を、A4用紙横1枚にまとめて書くとする。この場合、用紙の左端の上から下に第1時のWarm-upからConsolidationまでの授業構成を書き、同様に用紙右端の上から下に最後の第9時の授業構成を書く。

このとき、投げ込み活動を例えば毎時のWarm-upの後に10分程度行くと計画する(毎授業の場合は長い時間は割けない)。この9回の投げ込み活動をマーカーでハイライトすれば、それは単元計画において、横断的に細く長い「帯」を成す。

帯活動はこのような「短時間継続的に行う投げ込み活動」を指す学校英語教育独特のネーミングである。投げ込み活動が単発的で時間を長くとれるのに対し、帯活動は継続的で短時間行う。

### 3. Warm-up や Review と帯活動

帯活動は授業のどこで実施できるだろうか。ある教師は *NEW CROWN* の GET の左ページを、Warm-up → Review → Presentation (POINT) → Practice (Drill) → New Words (Words) → Reading (本文) → Consolidation と進めるだろう。別の教師は、GET の右のページも扱い (本文は2時間目に回す)、Warm-up → Review → Presentation (POINT) → Practice 1 (Drill) → Practice 2 (Word Corner と Practice) → Consolidation と進行するかもしれない。

こうした授業では帯活動を Warm-up や Review の代わりとすることができる。Warm-up には Warmer と Lead-in の2種類ある。Warmer は授業へのレディネスを形成するために行う。教師と生徒が英語で短い対話をしたり、簡単なゲームをしたりする。本時の授業の話題とは特に関連しない活動になる。Lead-in は本時の話題に関係する内容を扱う。例えば本時の Reading の文章がインターネットを扱っている場合、普段どのくらい何の目的でインターネットを使うか、ペアで短時間話し合わせて、本時の話題を個人的な問題として捉えるよう導く。

この2種類の Warm-up のうち、帯活動が代われるのは Warmer の方である。毎授業の冒頭で英語の歌を歌う帯活動には、英語への興味をかき立てる投げ込み活動の役割と、これから始まる授業に向けて心と体を整える Warmer の働きを期待できる。

Review には補強的なものと拡大的なものがある。補強的な復習は前時の学習内容を思い出し、定着させるのが目的である。機械的な口頭練習、音読、小テスト、ディクテーションなどを行う。拡大的な復習では前時までに習得した語彙や文法などを総合的に、できるだけ使用場面に近い状況で活用させる。前時よりも以前の既習事項も含めて言語材料を何度も練習させ、異なった場面で英語を使う経験を積み重ねて定着を期待する。インフォメーションギャップを利用した活動や空所補充会話などをする。

この2つの Review で帯活動に置き換えられるのは拡大的な復習の方である。毎回の授業で教師が示す話題についてペアで簡単な対話を行い、結果を

報告する Short Dialogue の活動がその一例である。この帯活動には、幅広い言語材料の定着という拡大的な復習の役割と、螺旋的に毎時間繰り返すことで「話せるようになった!」という有能感を生徒に与える投げ込み活動の機能を期待できる。

### 4. 帯活動の目的

これまでみた帯活動は、英語への興味をかき立てる、英語を学ぶ喜びを味わう、英語学習への意欲を増す、英語学習でのつまづきを取り除く、言語材料を定着させる、有能感を与える、Warm-up や Review の代わりとする、を目的としていた。さらに、中学校英語教育では他の目的でも行われる。

その1つは、生徒が苦手としていることを克服させるために行う帯活動である。生徒がカタカナ発音に終始し、英語らしいリズムを身に付けられない。これを克服するために、市販の教材を用いて毎授業の冒頭でチャンツに取り組みさせる実践は、そうした帯活動である。ここには授業へのレディネスを形成するという Warm-up の目的を超えた意図がある。

別の帯活動では、教師が生徒に特に伸ばしたい技能に取り組みさせる。「大勢の級友の前でスピーチができる生徒を育てたい。」これは多くの教師が抱く願いである。毎授業の冒頭で1人ずつ Show & Tell をさせる帯活動には、そうした願いをかなえる意図がある。生徒には、スピーチ原稿を書く、原稿を見ないで発話する練習をする、物を見せる・強調するなどのデリバリーに配慮するなど、拡大的な復習の範囲を超える学習が求められることになる。

### 5. 教師にとっての帯活動

帯活動が「短時間継続的に行う投げ込み活動」であるならば、帯活動を行う教師には投げ込み活動を選ぶ・作る自由が与えられていると言える。授業の10分を帯活動に、残り40分を教科書を使う指導にあてるとする。このとき教師には、全カリキュラムの少なくとも2割を自分で編成する裁量を与えられたことになる。目の前の生徒のニーズやウォンツ、さらには教師自身の好みや夢を勘案して、どんな教材・活動を投げ込むか。教師が自らの独自性を発揮し、創造性を生かせる点が帯活動の醍醐味だ。